

Gribsby Episode に見る Wilde の芸術と人生の問題

大 淵 利 春

The Importance of Being Earnest は Oscar Wilde の最高の喜劇であり、英国演劇史に残る傑作である。リアリズム芸術に反発した Wilde は実人生とは切り離された全くナンセンスな純粋喜劇を作り上げ、その結果、Wilde の理想とする醜悪さや苦しみのない芸術が誕生したのである。*Earnest* の世界では、既成の価値観が逆転され、現実にはありえない absurd なシチュエーションが生み出されているため、観賞者は一種のユートピアのような印象を抱く。

しかし、*Earnest* が完全に実人生と関わりがないとは言えない。Wilde にとって、芸術対人生の問題は大きなテーマであり、作品の中で繰り返し扱ってきた。例えば、*The Picture of Dorian Gray* においては、作品と Wilde の実人生との関わりは比較的に見えやすい。一方、*Earnest* では、このことは隠されているため一見ただけではわかりづらい。しかし、この劇の中では Wilde の芸術と人生の関係に関する考えが集約され、芸術と人生が一つになっているのである。そのことが最も明白に読み取れるのは初演の際、G.Alexander によって削除された Gribsby Episode である。

現在、一般に流布しているテキストは短縮された 3 幕版であり、上演も 3 幕で行なわれることが多く、この削除部分を含む 4 幕版はこれまであまり言及されることがなかった。一つの芸術作品として見れば、この削除によって作品はより完成度を増したように思われる。しかし、この削除にはもう一つ大きな理由があった。それは、この箇所にも Wilde 自身の実人生が映し出されているからである。そこで、この Gribsby Episode に着目し、当時の Wilde の生活状況を書簡、伝記、その他の資料から探り、また、その後の Wilde の人生を考慮に入れ、Wilde 文学における芸術対人生の問題について考察してみたい。

I

まず初めに、3幕版と4幕版の相違点についてまとめてみたい。オリジナルの4幕版に自信を持っていたWilkeは、Alexanderに3幕に短縮するように説得されても一行たりとも削除されることを好まなかった。H.Pearsonの伝記の中に次のようなWilkeとAlexanderの削除に関するやりとりがある。

“Do you realise, Alec, what you are asking me to sacrifice?”

“You will be able to use it in another play.”

“It may not fit into another play.”⁽¹⁾

Alexander自身は立場を乱用するようなことはせず、作家の意志をできるかぎり劇に反映しようと試みた演出家であった。しかし、当時のfarceはGilbertやPineroの劇がそうであるように、通例3幕構成であり、farce的な要素の濃い*Earnest*が4幕であることにAlexanderは違和感を感じたようだ。問題のGribsby Episodeは2幕にあり、3幕版では主にこの部分が削除され、2幕と3幕が合わせて2幕となっている。このGribsby Episodeは劇の主筋からすれば過剰な要素であるとも言え、これを欠いてもプロットが破綻をきたすということではなく、3幕版は4幕版に比べて全体的にすっきりした印象を与える。

また、3幕版と4幕版にはGribsby Episode以外にも次のような相違点がある。3幕版では名前が言及されるだけのJackのManor Houseの庭師であるMoultonが、4幕版では2幕のはじめにわずかではあるが登場する。このMoultonやGribsbyといった出番の少ない人物を廃したのは、役者に払うサラリーを減らすというより実際的な理由も考えられるが、一つの芸術作品としてみても、この削除は劇の純度を高めていると言えよう。他にも、Lady Bracknell, Miss Prism, Dr.Chasubleのセリフが削除されているなどの違いがある。R.Jacksonによれば、これらの変更によってfarce的な印象が薄れるという効果もたらされている。そして、その結果、Alexanderの演じたJackの役割が4幕版に比べて大きくなっている。WilkeはAlexanderへの手紙の中で、“I must tell you candidly that the two young men’s parts are equally good.”⁽²⁾と述べているが、3幕版では明らかにJackの方が強い印象を与える。以上のように、Alexanderによる削除は彼の個人的な都合によるところが大きいことも事実である。しかし、前作*An Ideal Husband*がやや冗長の感を否めないことを考えれば、過剰な要素を切り詰めることでテンポが良くなり、劇の緊密度を

高めていると言えるだろう。

Wilkeは95年1月17日にはDouglasと共にアルジェリアに発ち、2月3日までそこに滞在している。帰国したWilkeは、最後の数回のリハーサルに立ち合った。そのためにWilkeはDouglasを残して一足先に帰国したのだが、実際はWilkeの存在はテキストの変更にはほとんど影響を与えなかった。明らかにWilkeの手になるものと認められるのは、Lady BracknellからLady Bracknellへの名前の変更程度である。2月14日の初演の舞台を観劇した後、WilkeはAlexanderに対して次のように感想を述べている。

“My dear Alec, it was charming, quite charming.”

“And, do you know, from time to time I was reminded of a play I once wrote myself called *The Importance of Being Earnest*.”⁽³⁾

自分の作品に絶対的な自信を持っていたWilkeらしい言葉であるが、後にRobert Rossはこの作品を出版する際、3幕版を採用しているし、Wilkeもそれを認めている。“The Truth of Masks”の中でWilkeは“…a theatre should be in the power of a despot. There may be division of labour, but there must be no division of mind.”⁽⁴⁾と主張しているが、劇作家と演出家との間の対立によって、劇そのものが損なわれることを恐れたのだろう。結局、3幕版による上演は大成功し、その結果、4幕版は顧みられることが少なくなった。しかし、Wilke文学の主要なテーマである芸術と人生の問題を考える際、4幕版のGribsby Episodeが重要な意味を持つてくるのである。

II

Gribsby Episodeの具体的な内容は次のようなものである。solicitorであるGribsbyがJackのSavoyホテルでの借金の返済を迫るためにJackのWooltonの屋敷を訪れる。Ernest Worthingを装っていたAlgernonはJackの借金を押しつけられ、窮地に立たされるが、Jackによって救われるというものである。そして、このエピソード、それに*Earnest*全体を考えると、この劇の中にWilkeの実人生が見えてくるのである。

*Earnest*の執筆を始めた1894年の夏頃には、WilkeはAlfred Douglasとの豪遊がたり、経済的に非常に苦しい状態にあった。WilkeはDouglasはもちろん、AlexanderやL.Wallerらに当てた手紙の中で、しきりに経済的に困窮

していることを訴えている。ここでは、1894年7月のAlexander 当ての手紙を例として挙げる。

“…my dear Aleck, I am so pressed for money that I don't know what to do. Of course I am extravagant.”⁽⁵⁾

そして、Wilde は *Earnest* の執筆を条件に Alexander から 150 ポンドを前借りしているのである。Wilde は Douglas とともに Jack(Ernest)同様、Savoy ホテルなどで豪遊し、多額の収入があったにもかかわらず、金に困る生活をしてきた。ちなみに、Wilde は *Lady Windermere's Fan* の成功で 7000 ポンドの収入を得ているが、当時の一般の労働者階級の年収は約 50 ポンドであったのだから相当な額である。(なお、当時の 1 ポンドはほぼ 2 万 4 千円位なので、7000 ポンドといえば 1 億を超える額となる。)また、初演の際には削除されたが、1 幕の Algernon と Lane とのキュウリのサンドイッチをめぐるやりとりも当時の Wilde の経済状態を窺わせて興味深い。Lane はキュウリのサンドイッチが market になく、ready money でも手に入れることができなかつたと Lady Bracknell に対して嘘をつき、Algernon もまた “I am greatly distressed, Aunt Augusta, about there being no cucumbers, not evenf or ready money.”⁽⁶⁾ と述べ、口裏を合わせている。この二人のやりとりは、Algernon には ready money がなかったことを暗示しているが、これは *Earnest* 創作当時の Wilde の経済状態の反映であろう。ここに Wilde の実生活が映し出されていると考えた Alexander は二度出てくる ready money という言葉を削除してしまった。これらことから察せられる Wilde の一見無軌道に見える出費の裏には、Victorianism への批判が込められている。Gribsby Episode の中で、Dr.Chasuble は Ernest の 762 ポンドという食費に関して、次のように述べている。

“It certainly is a painful proof of the disgraceful luxury of the age. We are far away from Wordsworth's plain living and high thinking.”⁽⁷⁾

このセリフが示すように、ヴィクトリア時代においては質素な生活と高邁な精神が美德とされた。Wilde はこうした風潮に偽善を感じ、借金をしてまで贅沢な生活を送り、それを誇示してみせた。Ernest の 762 ポンドの食費に対して、Jack は “I never saw such reckless extravagance in all my life.”⁽⁸⁾ と述

べているが、このことは Wilde 自身にも当てはまるのである。また、Algernon の借金の問題もたびたび示唆されている。Lady Bracknell は “…Algernon has nothing but his debts to depend upon.”⁽⁹⁾ と述べているし、Algernon 自身、 “I happen to be more than usually hard up”⁽¹⁰⁾ と Jack に訴えている。その他にも、Algernon の “Only relatives, or creditors, ever ring in that Wagnerian manner.”⁽¹¹⁾ といったセリフや、1 幕のラストで請求書を破く Algernon のト書⁽¹²⁾などは、Algernon もまた Gribsby のような債権者に迫られる恐れがあったことを示している。このような Ernest、そして Algernon は時代に反発する Wilde のポーズを表している。この劇においては Ernest の借金が食費であることからわかるように、人間の様々な欲求の中でも食欲が強調されており、逆に他の人間の欲求はほとんど描かれていない。キュウリのサンドイッチやマフィンなどを食べるシーンがほとんど全編に渡って現れるのである。Wilde 自身もまた、美食家であったことはよく知られているが、homosexuality などの他の欲求が明確には描かれなことで、逆に抑制の効果を挙げているのである。つまり、そうした character たちを通して、Wilde は pleasure を追い求める人間の姿を鮮明に描きだしたのである。そして、Gribsby Episode によって、Wilde が意図したヴィクトリア朝的な plain living に対する風刺がより明確に見えてくる。

III

次に、Gribsby Episode を通して Jack と Algernon の関係を考えてみたい。彼らの関係は Wilde と Douglas との関係を思わせるところが随所にある。共に年長者 (Wilde, Jack) と年下の友人 (Douglas, Algernon) の関係である。まず、Jack と Wilde を見てみると、この二人は共通している要素が多い。田舎における Justice of the Peace であり、Cecily の後見人でもあるまじめな Jack と、都会における偽名を用いて女性に言い寄る Ernest の二重のイメージは、Wilde 自身の二重生活を連想させるのに十分である。Gribsby Episode ではないが、3 幕版ではカットされている次のような Jack と Algernon の対話が一幕にある。

“Jack: Well, I can't dine at the Savoy. I owe them about £ 700. They are always getting judgments and things against me. They bother my life out.”

“Algernon: Why on earth don't you pay them? You have got heaps of

money.”

“Jack: Yes, but Ernest hasn't, and I must keep up Ernest's reputation. Ernest is one of those chaps who never pays a bill. He gets writted about once a week.”⁽¹³⁾

Jack は都会に出てくる理由を “Oh, pleasure, pleasure! What else should bring one anywhere?”⁽¹⁴⁾ と述べているが、3幕版ではほとんど見えなかった Jack の都会での生活が、削除部分に注目することで少しは明らかになってくる。そして、その姿は Wilde の一面と重なるのである。Wilde 自身、一方では妻子を持つ家庭人であり、その一方で Douglas をはじめとする男友達たちと同性愛関係が続けるもう一つの顔を持っていた。domesticity for John である Jack と、homosexuality を暗示している Ernest という二つの名前は、まさに Wilde の二面性を象徴していると言える。また、Gribsby Episode では、Jack はしきりに Algernon の言動を非難しながら、最後には借金を支払うことで Algernon を救ってやるが、このような許し、寛容の精神も Wilde と重なるように思われる。Miss Prism はこの Jack の行為に対して “I must say that I think such generosity quite foolish.”⁽¹⁵⁾ と述べているが、Wilde 自身も、*De Profundis* の中で Douglas に恨み言を述べながら、出獄後、彼と再会しているのである。

Jack と Wilde との関連をこのように見てくると、Douglas と Algernon の姿が重なってくるのは自然なことだと思われる。一幕、二幕で見られるキュウリのサンドイッチやマフィンを食べ続ける Algernon や、Jack の Woolton の家に押し掛け、Jack に迷惑を掛ける Algernon は、Wilde の金で遊び回り、Wilde の部屋に遠慮なく押し掛ける Douglas の姿を思い起こさせる。Worthing で *Earnest* 執筆中の Wilde が Douglas やその兄の度重なる訪問を受け、執筆に支障をきたしていたことはよく知られている。また、Algernon の伯母の Bracknell という名前が Douglas の母親が住んでいた Berkshire の地名から取られていることから、Wilde が Algernon という放蕩児を創造するにあたり、Douglas を念頭においていたことは確実であるように思われる。以上のように、Jack—Algernon の関係は Wilde—Douglas の実生活における関係を反映している。そして、それは homosexual な関係をも含んでいると考えられる。1幕の終わりで Algernon は “Well, let us go to the Club.”⁽¹⁶⁾ と言って Jack を誘っているが、クラブが男だけの世界であったことを考えれば、ここに homosexuality が暗示されているとみることも可能だろう。

しかし、その一方で Algernon の中に Wilde の姿を見ることも可能である。

Algernon のダンディ風のセリフの数々こそ Wilde を思わせる最も明瞭な証拠であるし、Algernon もまた Bunbury という架空の人物を創造することで都会と田舎の二重生活を営んでいるからである。そして、Gribsby Episode では、Ernest Worthing を装っていた Algernon は借金を支払うことができないために Holloway 監獄に送られる危機に陥る。

“Gribsby(Pulls out watch):I am sorry to disturb this pleasant family meeting, but time presses. We have to be at Holloway not later than four o'clock;otherwise it is difficult to obtain admission. The rules are very strict.”

“Algernon:Holloway!”

“Gribsby:It is at Holloway that detentions of this character take place always.”⁽¹⁷⁾

周知のように、Wilde は 1895 年 4 月 5 日に逮捕され、翌 6 日に Holloway 監獄に収容された。つまり、この Gribsby Episode における Algernon は、まさに後の Wilde 自身の運命を予言しており、‘The Decay of Lying’ 中の “Life imitates art far more than art imitates life.”⁽¹⁸⁾ という Wilde の最も有名な言葉を想起させる。また、Jack が Wilde の分身であることは既に述べたが、Jack が Ernest を Paris で殺していることにも注目したい。なぜなら、Wilde もまた Paris のホテルで死を迎えているからであり、このこともまた Wilde の人生の予言となっているのである。このように、Algernon は Wilde の分身でもあるのだ。Algernon の創造にあたり、Wilde が Douglas をモデルにしたであろうことは既に述べたが、それは同時に己れの姿でもあった。ナルシズム的傾向を強く持っていた Wilde は年下の美青年 Douglas の中に己れ自身の姿を投影していたのではないか。そして、Algernonこそ、Wilde の考えるダンディの具現であると言える。Algernon は Ernest という偽名、すなわち嘘を用いて Cecily に求婚し、結婚するに至っているが、これはまさに ‘The Decay of Lying’ 中の言葉、 “For the aim of the liar is simply to charm, to delight, to give pleasure.”⁽¹⁹⁾ の実践である。Algernon の嘘は pleasure を生み出しているのである。

ところで、Algernon が Holloway 監獄に送られる危機に陥りながら Ernest Worthing という identity に固執することは注目に値する。Gribsby Episode の中に次のような Algernon と Jack の対話がある。

“Jack:Never mind what he says. This is the way he always goes on. You mean now to say that you are not Ernest Worthing,residing at B.4.,The Albany. I wonder, as you are at it,that you don't deny being my brother at all. Why don't you?”

“Algernon:Oh! I am not going to do that,my dear fellow. It would be absurd. Of course I'm your brother.And that is why you should pay this bill for me.”⁽²⁰⁾

また、Gribsby Episode の少し後の削除部分に、次のような Cecily と Algernon の対話がある。

“Cecily:But why did you try to put your horrid bill on poor Uncle Jack? I think that was inexcusable of you.”

“Algernon:I know it was;but the fact is I have a most wretched memory. I quite forgot I owed the Savoy £762 14s.2d.”⁽²¹⁾

架空の弟と偽って屋敷にやってきた Algernon に逆襲するかのように自らの借金を彼に押しつけ、嘘を暴露しようとする Jack もしたたかであるが、それにも怯まず、Cecily を口説くために自分の借金であると嘘をついて認めてしまう Algernon も相当にしたたかだと言わねばならない。*Earnest* の世界では、嘘をつくという行為が芸術、美の創造の象徴となっているが、そうであるならば、Cecily の心をつかむという自らの欲望を達成するために嘘をつき通す Algernon の姿は、裁判で負けることが予想されたにも関わらず、自分の信念を貫き通し美に殉じた Wilde の姿を連想させる。監獄送りの危機に陥りながら嘘をつき通して幸福を手にする Algernon は Wilde の憧れの姿であったのだろう。ヴィクトリア時代に現実の人生で嘘（美）を信奉し続けた Wilde は逆に悲劇的な結末を迎えることになる。

IV

以上のように、*Earnest* には巧みに隠されているものの、Wilde の実人生が投影されており、Gribsby Episode を読むことでそれが一層鮮明になる。Wilde は *Earnest* 執筆当時、経済的な問題や Douglas とその家族との関係と

いった様々な問題を抱えていた。Wilde はそれらを *Earnest* の中に描き込み、ハッピーエンドで締め括ることで、それらの問題から生じる恐れのある ennui を克服しようとしたのではないか。R.Jackson は “The author identifies himself closely with a group of characters whose appetites and attitudes are vindicated in a conventionally happy ending.”⁽²²⁾ と述べている。R.Ellmann によれば、Algernon の Holloway 監獄送りの挿話は、punishment のパロディになっている。⁽²³⁾ 自分もいつか同性愛行為から裁かれることになるかもしれないと感じていた Wilde はそれさえも戯画化し、滑稽なものとしてしまったのだ。また、Ernest を Paris で severe chill で、Bunbury を explosion で抹殺しようとするので死すら笑いの対象にしている。Jack が架空の Ernest を Paris で殺そうとすることが、Wilde 自身の死を予言していることは既に述べたが、*Dorian Gray* や *Salome* が道徳の見地から非難されたことから、Wilde は Byron や Shelly のように自分もイギリスで死ぬことはできないと感じていたのかもしれない。これらの例からわかるように、Wilde は *Earnest* という芸術作品の中に自らの人生を描き出し、それを客体化した。Wilde にとって、芸術とは単なる自然の模倣ではなく、人生に先行し、それを充実させるためのものであった。つまり、芸術は悲哀や倦怠に満ちた人生をありのままに写すのではなく、それらを克服するために存在すると Wilde は考えていた。実人生より先に芸術の中で悲哀や倦怠をパロディ化することで、人生を支配し、自己の完成を願ったのである。既成の価値観が転倒され、ナンセンスに彩られた *Earnest* の世界は、まさに Wilde の想像力から生まれた utopia であり、この劇からは pleasure は得られても、悲哀や倦怠が得られることはあるまい。Jack は Ernest を葬り去ろうとするが、自分の真の identity が実は Ernest であったため、葬ることができない。また、Jack は Algernon を監獄送りの危機に陥れるが、結局は彼を助けている。Ernest, Algernon の二人の放蕩児のイメージを Douglas と重ね合わせて見るならば、ここに Douglas との関係を清算したいと願いつつ、そうすることのできない Wilde のアンビバレントな心情を読み取ることができる。*Earnest* 執筆当時、Douglas 本人や Queensberry 一族と友好な関係になかったことを考えると、このことが一層強く感じられる。

Wilde の経済状態をよく知っていた Alexander は、既に述べたように初演の際、Gribsby Episode や二度でてくる ready money という言葉、Ernest の 762 ポンドの借金などの主として金にまつわる箇所を削除し、Wilde 自身の姿を隠してしまった。自分の演じる Jack の役割を大きくしていることから、この削除に Alexander のエゴが影響しているのかもしれないが、Alexander の意

図はともかく、芸術家を隠すことが芸術の目的であるとした Wilde の芸術観からしても、この削除は *Earnest* をより高い芸術としていると思われる。

芸術作品と芸術家の人生を安易に結びつけることは危険である。しかし、このように削除された Gribby Episode を視野に入れることで、この劇の中に当時の Wilde とその周辺の人々との関係が暗示されていると解釈できるのである。

Notes

- (1) Pearson, Hesketh, *The Life of Oscar Wilde*: Methuen, 1946, p.254
- (2) *The Letters of Oscar Wilde* edited by Rupert Hart-Davis:
Hart-Davis, 1962, p.369
- (3) Pearson, Hesketh, *The Life of Oscar Wilde*, p.257
- (4) Wilde, Oscar, *Complete Works of Oscar Wilde*: Collins, 1994, p.1172
- (5) *The Letters of Oscar Wilde*, p.359
- (6) *The Importance of Being Earnest* edited by Russell Jackson:
A & C Black, 1980, p.19
- (7) Ibid. p.109
- (8) Ibid. p.108
- (9) Ibid. p.91
- (10) Ibid. p.10
- (11) Ibid. p.17
- (12) Ibid. p.39
- (13) Wilde, Oscar, *Complete Works of Oscar Wilde*, p.362
(The word 'writted' is perhaps 'writ' .)
- (14) *The Importance of Being Earnest* edited by Russell Jackson, p.7
- (15) Ibid. p.111
- (16) Ibid. p.36
- (17) Ibid. p.110
- (18) Wilde, Oscar, *Complete Works of Oscar Wilde*, p.1082
- (19) Ibid. p.1081
- (20) *The Importance of Being Earnest* edited by Russell Jackson, p.109
- (21) Wilde, Oscar, *Complete Works of Oscar Wilde*, p.389
- (22) *The Importance of Being Earnest* edited by Russell Jackson, p. X X X V
- (23) Ellmann, Richard, *Oscar Wilde*: Hamish Hamilton, 1987, p.422

Text & Bibliography

Primary Sources

- Wilde, Oscar, *The Importance of Being Earnest* ed. Russell Jackson
(London: A & C Black, 1980)
- Wilde, Oscar, *Complete Works of Oscar Wilde*
(Glasgow: Harper Collins Publisher, 1994)
- Hart-Davis, Rupert, ed. *The Letters of Oscar Wilde*
(London: Rupert Hart-Davis Ltd., 1962)
- Hart-Davis, Rupert, ed. *More Letters of Oscar Wilde* (London: John Murray, 1985)

Secondary Sources

- Beckson, Karl, ed. *Oscar Wilde: The Critical Heritage*
(London & New York: Routledge & Kegan Paul, 1997)
- Beckson, Karl, *The Oscar Wilde Encyclopedia* (New York: AMS Press, 1998)
- Bloom, Harold, ed. *Oscar Wilde's The Importance of Being Earnest*
(New York, New Haven, Philadelphia: Chelsea House Publisher, 1988)
- Donohue, Joseph with Berggren, Ruth ed. *Oscar Wilde's The Importance of Being Earnest: A Reconstructive Critical Edition of the First Production, St. James's Theatre, London, 1895*
(Gerrards Cross, Bucks: Colin Smythe, 1995)
- Ellmann, Richard, *Oscar Wilde* (New York: Hamish Hamilton, 1987)
- Ericksen, D.H., *Oscar Wilde* (New York: Twayne Publishers, 1977)
- Kohl, Norbert, *Oscar Wilde: The Works of a Conformist Rebel*
(Cambridge: Cambridge University Press, 1989)
- Kronenberger, Louis, *The Thread of Laughter* (New York: Hill & Wang, 1952)
- Nassaar, C.S., *Into the Demon Universe: A Literary Exploration of Oscar Wilde*
(New Haven: Yale University Press, 1974)
- Pearson, Hesketh, *The Life of Oscar Wilde* (London: Methuen & Co. Ltd., 1949)
- Raby, Peter, *The Importance of Being Earnest: A Reader's Companion*
(New York: Twayne Publishers, 1995)
- Raby, Peter, *The Cambridge Companion to Oscar Wilde*
(Cambridge: Cambridge University Press, 1997)

Small, Ian, *Oscar Wilde Revalued* (Greensboro:ELT Press,1993)

Wordsworth, William, *Poetical Works of Wordsworth*

(London:Oxford University Press,1969)

Worth, Katharine, *Oscar Wilde* (London:Macmillan,1983)

(本論文は、2000年6月3日慶應義塾大学で開催された第22回日本ワイルド学会の春季大会における口頭発表をもとにしたものです)